

令和 6 年 7 月 19 日現在

機関番号：25504

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K11049

研究課題名（和文）実践力向上をめざした助産師外来担当者向けe-ラーニングの開発と評価

研究課題名（英文）Development and evaluation of e-learning program for midwifery clinics aimed at improving midwives' practical skills

研究代表者

渡邊 淳子（Watanabe, Junko）

周南公立大学・人間健康科学部設置準備室・教授

研究者番号：30539549

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：助産師外来担当者の実践力向上を図るe-ラーニング教育プログラムを構築し、その評価を行った。インストラクショナルデザインであるADDIEモデルを活用し、ニーズの評価と分析・デザイン・開発・実施・評価の各段階を検討した。ニーズの評価と分析は、妊婦には健康関連QOL、助産師にはヒアリングを実施した。実施では開発した助産師外来用ルーブリックとGibbsのリフレクションサイクルを活用し、e-ラーニングは、助産師の実践力とは助産師の実践力を高めるために臨床推論、ルーブリック、リフレクション、模擬事例を用いたシミュレーションとした。評価では受容性はあるが短時間で修得できる教育を希望していた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、助産師外来担当者の実践力の向上を目指したe-ラーニング教育プログラムを構築し、その評価を行った。卒後教育プログラムを作成することが困難な小規模施設でも活用でき、継続的に自己研鑽出来る内容とした。助産師はその専門性を活かして、多様なニーズに対応し、ローリスクな妊婦のみを対象とするのではなく、ハイリスクな妊婦に対しても、安心・安全・快適な出産が実現できるように役割を果たしていくものである。また、近年、産後うつなどによる自殺、妊娠中の未受診、サポート不足による虐待の問題がクローズアップされており、助産師の支援の重要性が指摘されており、実践力向上に向けた教育の受容性が明らかになった。

研究成果の概要（英文）：The program was worked out so that even small-scale medical institutions where a postgraduate education program can hardly be prepared can use it and, for that, a Midwifery Clinic Rubric developed by the researchers in the previous studies and Gibbs' Reflective Cycle were utilized. For developing the program, an ADDLE model which is an instructional design was used and each step of the assessment and analysis of needs, development, implementation, and evaluation was examined. For the assessment and analysis of needs, a questionnaire survey in pregnant women using the health-related QOL (SF-36v2) and an interview with midwives. A learning course was incorporated in the program where the trainee conducts self-reflection after learning and accept feedbacks from others, and this learning course was implemented.

研究分野：助産学

キーワード：助産師外来 e-ラーニング リフレクション ルーブリック 卒後教育

1. 研究開始当初の背景

助産師外来とは、「院内助産・助産師外来ガイドライン 2018」において、「緊急時の対応が可能な医療機関において、助産師が産科医師と役割分担をし、妊産褥婦とその家族の意向を尊重しながら、健康診査や保健指導を行うこと」と定義されている。助産師はその専門性を活かして、多様なニーズに対応し、ローリスクな妊婦のみを対象とするのではなく、ハイリスクな妊婦に対しても、安心・安全・快適な出産が実現できるように役割を果たしていくものである。高齢出産やハイリスク妊婦が増加している現在、助産師外来の役割はますます期待される。2017年に筆者が実施した助産師外来の実態調査では、担当助産師の基準・教育・評価は、医療機関の規模・機能・地域によって格差があった。

2015～2016年には、妊娠中から産後期の自殺者は102人であり、妊産婦死亡の原因の中で最も多いとの調査結果が出た。ライフスタイルは変化し、仕事やプライベートでのストレスを抱え、結婚・出産年齢の上昇からも、メンタルヘルスの問題がクローズアップされた。妊産婦への精神的支援は我が国の重要な課題である。妊娠中のうつ病は約10%にみられ、その後の母子関係に影響を及ぼし、児童虐待へと繋がっている。助産師外来担当者の実践力を向上させることが、妊婦・褥婦の精神的安定に繋がり、妊娠うつ・産後うつを減少させることができると考える。

2. 研究の目的

本研究の目的は、助産師外来担当者の実践力の向上を目指したe-ラーニング教育プログラムを構築し、その評価を行うことである。この教育プログラムは、著者がこれまで開発した助産師外来用ルーブリックとGibbsのリフレクションサイクルを活用したセルフリフレクションによって自己研鑽し、助産実践能力の向上を図るものである。

3. 研究の方法

(1) 妊婦を対象とした健康関連QOLおよびニーズ調査

健康関連QOL調査では、妊娠中の女性を対象にSF-36v2を用いて調査会社を通じたWeb調査を実施した。初産婦159名、経産婦141名(53.0%/47.0%)の計300名から回答を得た。平均年齢は32.1(SD5.71、最小値21、最大値51)歳、妊娠初期15名(5%)中期105名(35%)後期180名(60%)助産師外来受診経験がある123名(43%)出産前教育を受講した157名(52.3%)であった。SF-36v2での【日常役割機能(身体)】【全体的健康感】【活力】【日常役割機能(精神)】【心の健康】の平均はそれぞれ、55.55(SD30.62)、61.66(SD14.96)、51.56(SD16.94)、62.89(SD31.89)、60.15(SD18.33)であった。不安に感じていることでは、「新型コロナウイルスの感染」、「日々の精神的な不安定さ」、「感染対策から出産前教育が受けられないこと」、「感染対策から立ち合い分娩・面会ができないこと」、「妊娠・出産に対する経済的不安」などをあげ、助産師へのニーズでは、「優しくしてほしい」、「出産時は傍についてほしい」、「妊娠・出産に対する知識の提供」、「いつでも相談に乗ってほしい」などがあつた。SF36-v2では、国民標準値データと比較し高得点であったが個人差が大きく、コロナ渦では出産時の家族のサポートが得られにくいことから助産師のケア・配慮に期待していた。

(2) 助産師のニーズ調査

助産師10名を対象にインタビュー調査を実施した。実施した助産師外来の自己評価と今後

希望する卒後教育内容について助産師外来終了後に、聞き取りを行った。自己評価では、「臨床判断はこれで良いのかという不安がいつもある」、「日常業務に追われる」、「業務が優先で話を聞く時間がない」、「他者からの評価を受ける機会がない」、「自己の実践を振り返る機会が欲しい」、「相談する人がいない」などがあり、希望する教育内容は、「自己研鑽への希望」、「診断技術の向上」、「メンタルヘルスへの支援方法」、「特定妊婦への支援方法」などであった。

(3) ニュージーランドにおける助産師ケアの視察

ニュージーランドにおける助産師の独立した活動を視察した。女性と助産師のパートナーシップのもとにシステムが確立していた。助産師は、妊婦と一緒にケアプランを立案し、必要に応じて変更するなど女性の妊娠・分娩・産褥期のケアの責任者となっており、GP と同等の責任を負っていた。また、助産師の継続教育が制度化されており、卒後のメンター制度をほとんどの助産師が希望している。妊婦健診では、妊婦は常に自身のカルテを所持し、身体的管理を自ら行っている。必要時、助産師の業務範囲内で薬の処方、検査結果を判断し医師に連絡する、和痛緩和用麻酔薬の使用、会陰切開や縫合、緊急時の処置が可能である。教育プログラムの作成には、女性との関わり方、臨床薬理や臨床検査の知識、診断技術などを参考にした。

(4) 教育プログラムの作成

教育プログラムの開発には、インストラクショナルデザインである ADDIE モデルを活用し、ニーズの評価と分析・デザイン・開発・実施・評価の各段階を検討した。ニーズの評価と分析は、妊婦 300 人を対象とした健康関連 QOL(SF-36v2) の調査結果および助産師 10 名からのヒアリングを用いた。デザインのゴールを「リアリティを追求した体験学習からセルフリフレクション能力を育成する」と明確化した。学習後、自己の実践をリフレクションし、他者からのフィードバックを受け入れるという学習コースの設計をし実施した。e-ラーニングは、1 回の所要時間を 30 分とし、コンテンツ内容は、助産師の実践力とは 助産師の実践力を高めるために 臨床推論 ループリックおよび助産師外来用ループリック リフレクション 模擬事例を用いたシミュレーションの 6 回シリーズである。

4. 研究成果

研究参加者は、助産師外来を担当している助産師 10 名であり、年齢は 27 歳～38 歳、助産師経験は 5 年 2 か月～9 年 2 か月、助産師外来経験は 6 か月～3 年 6 か月であった。インタビュー時間の平均は、25.5 分であった。インタビュー内容から逐語録を作成し、教育プログラムの成果について概念化を図った。その結果、「自分自身の傾向に気付くことができた」、「自分自身が成長していることが実感できた」、「自己の課題が明確になった」、「今後の目標が明確になった」、「助産ケアに対するやりがいを感じた」という成果が得られた。また、e-ラーニング教育の受容性として、受講者全員が短時間での学習ができ、活用できるとした。助産師自身の到達度の可視化ができ、目指すべく方向性を踏まえながら、自己の関わりを振り返ることが出来ていた。その一方で、実践の場は多種多様な対象者が存在し、特に精神的なサポートや社会的な側面を考慮した個別事案への対応が難しいという課題があった。

今回の教育プログラムでは、ループリックとリフレクションと組み合わせた内容であるが、実際の事例を用いたシミュレーションでは、助産師自身がこれまでの実践の場面を想起し、セルフリフレクションを実施している場面があった。これは、助産師外来用ループリックにおいて、目指す目標を明確にし、その上でリフレクションの思考を活用し、実践をしながらのリフレクションが実施できていたことを表していた。事前に実施したインタビューでは、自己の課題に眼を向けていたが、教育プログラム後は、「出来たこと」、「自己の強み」を実感しており、

客観的に自己の行動を見つめ、現状分析からもう少しうまく関わるにはどうすれば良いのかという未来志向的な視点が出来るようになっていた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 渡邊淳子、齋藤益子、松永佳子、石川紀子、菱谷純子、得松奈月、池田真弓	4. 巻 4
2. 論文標題 実践能力向上を目指した助産師外来担当に向けた教育プログラムの評価	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本助産診断実践学会誌	6. 最初と最後の頁 39 48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村美幸、渡邊淳子	4. 巻 9
2. 論文標題 デイサービスを利用する糖尿病をもつ高齢者の看護上の問題状況と看護実践	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東京医療学院大学紀要	6. 最初と最後の頁 74 87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高橋愛美、齋藤益子、中嶋彩、渡邊淳子、平出美栄子	4. 巻 第3巻第1号
2. 論文標題 ニュージーランドにおけるMy助産師制度の現地研修からの学ぶ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本助産診断実践学会誌	6. 最初と最後の頁 54 59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡邊淳子、齋藤益子、高橋愛美、平出美栄子、中嶋彩	4. 巻 第3巻第2号
2. 論文標題 ニュージーランドにおける性教育 Family Planningの視察を通して	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本助産診断実践学会誌	6. 最初と最後の頁 23-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 渡邊淳子、齋藤益子、得松奈月、石川紀子、松永佳子、菱谷純子
2. 発表標題 助産師外来担当者向け教育プログラムに対するファシリテーターからの評価
3. 学会等名 第21回日本母子看護学会学術集会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 渡邊淳子、菱谷純子
2. 発表標題 コロナ渦における妊婦の健康関連QOLの実態
3. 学会等名 第63回日本母性衛生学会総会・学術集会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 松永佳子、野呂瀬崇彦、渡邊淳子、日紫喜光良
2. 発表標題 生殖可能年齢男女のプレコンセプションケアに対するニーズ
3. 学会等名 第63回日本母性衛生学会総会・学術集会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 菱谷純子、渡邊淳子
2. 発表標題 次世代育成力の母娘世代間伝達の様相 性成熟期の娘への調査
3. 学会等名 第36回日本助産学会学術集会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 中村美幸、渡邊淳子
2. 発表標題 デイサービスを利用する糖尿病をもつ高齢者に関連する介護職の業務内容
3. 学会等名 日本在宅ケア学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 渡邊淳子、菱谷純子、齋藤益子、石川紀子、松永佳子、得松奈月、池田真弓
2. 発表標題 助産師外来担当者に対するリフレクションを用いた教育プログラムの効果
3. 学会等名 第35回日本助産学会学術集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 渡邊幸恵
2. 発表標題 助産師外来担当者に向けた教育プログラムの開発 ルーブリックにおける評価から
3. 学会等名 第60回日本母性衛生学会学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 渡邊淳子
2. 発表標題 助産師外来担当者に向けた教育プログラムの評価
3. 学会等名 第34回日本助産学会学術集会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担 者	齋藤 益子 (Saito Musuko) (30289962)	関西国際大学・保健医療学部・教授 (34526)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------